

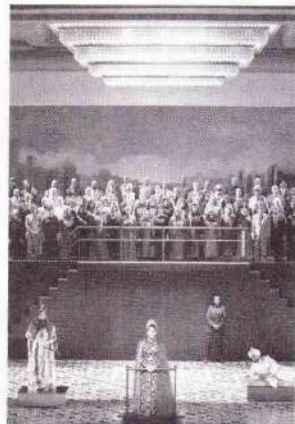
【Opera】

バイエルン州立歌劇場がディドナートで《セミラーミデ》プレミア

現在最も上昇気流に乗っているメゾソプラノ、ジョイス・ディドナートが題名役デビューとなるこの演目は、バイエルン州立歌劇場今シーズンの目玉公演の一つであるが、期待以上の出来映えだった（2月12日所見）。

ロッシーニの生まれた街ペーザロで育ち、ペーザロ・ロッシーニ・オペラ・フェスティバル主催者を父に持つミケーレ・マリオッティの指揮は確信に満ちていたが、ドイツの音色を持つ当歌劇場管弦楽団を前に序曲は空回りし、響きが空洞化したり、和音の高音部が弱いため、ロッシーニの輝かしい響きに欠けたりした。しかし歌が入ると、一流の歌手陣を超一流のアンサンブルに導いた。脇役まで全員粒揃いで息もつけない3時間半だったが、特筆すべきは、ローレンス・ブラウンリーの輝かしい声が光るイドレーノとアレックス・エスポーゾの安定した声で芸達者な悪役アスール、ダニエラ・バルチェローナの純朴なアルサーチェ、そしてジョイス・ディドナートにおいては、すべてを兼ね備えた真のディーヴァであった。ロッシーニがイタリアの劇場のために書いた最後のオペラのヒロインを、これだけ自然にこなせる適役がアメリカ人とは皮肉だ。「序曲」の途中から幕が上がると、北朝鮮の独裁者を思わせる王の銅像とイスラム的衣裳の合唱団や、最後に映像を乱用したために緊張感を緩めてしまったディヴィッド・エルデンの演出には、「ブー」と「ブラヴォー」が交差したが、それ以外は大成功を収め、当劇場の勢いを再度見せつけた。

（中東生）



今をときめくディドナートの題名役デビューは大成功に終わった ©W. Hölzl